

## 保守系オピニオン誌における外国人言説（3） －2000年代における雑誌『SAPIO』を中心に－

Discourse on Foreigners in Japanese Conservative Opinion Magazines(part 3):  
Focusing on Magazine Articles of *SAPIO* in the 2000's

倉 真 一

本稿では引き続き、雑誌『SAPIO』における外国人言説の分析を、2000年以降から現在に至る、分析上の時期区分では第四期中期から第五期に該当する雑誌記事を中心に行った。

第四期中期では、＜有益な外国人＞イメージを焦点とした特集記事が組まれていた。そこで描かれる外国人像は、ホスト社会にとって「都合の良い」、他者性を縮減され理解やコントロールが容易な、安心して「われわれ＝日本人」が活用できる外国人であった。対して第四期の後期では、記事の焦点は＜有害な外国人＞イメージに移行し、「われわれ＝日本人」は「外国人犯罪」に有効な対策をうてない「弱い主体」、さらには「弱い客体」＝「被害者」として語られた。その結果、次の第五期では「強い主体」として自身を回復しようとする欲望が、「外国人犯罪者」に対して「治安」を回復する政策主体という形をとって現れることになった。また治安対策の手段として移民政策が意味づけられる傾向が生じた。第五期も後期になると、＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な外国人表象が、治安対策の対象（客体）として、移民政策に投影されることで、同じく二項対立的な移民政策をめぐる論争が雑誌上で特集されるようになる。そこで回復されたナショナルな政策主体は、＜有益な外国人＞と＜有害な外国人＞を選別し、監視し、時には排除する主体として描かれることになる。

ここに至って、第一期の雑誌『SAPIO』にみられた政策主体としてのネーション、「われわれ＝日本人」は第三期におけるその揺らぎを経て、再び復活することになったのである。

**キーワード：**＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞図式、二項対立的な移民政策論争、政策主体としてのネーション

### 目 次

I. はじめに

II. 第四期中期&後期－＜有益な外国人＞から＜有害な外国人＞への焦点の移行－

(1) 第四期中期（2000年～2001年前半）

－＜有益な外国人＞イメージにみる他者性の縮減－

(2) 第四期後期 (2001年後半～2002年前半)

－＜有害な外国人＞イメージとわれわれ＝日本人の「弱い客体」化＝「被害者」化－

III. 第五期－政策主体としてのネーションの再構築－

(1) 第五期前期 (2002年後半～2004年前半)

－「治安対策」としての「移民政策」と政策主体としてのネーションの回復－

(2) 第五期後期 (2004年後半～現在)

－二項対立的な図式で語られる移民政策－

IV. おわりに

## I. はじめに

筆者は前稿において、1990年代後半の保守系オピニオン誌『S A P I O』における在日外国人に関する言説を分析した。そこで明らかになった点は、以下のとおりである [倉, 2007] <sup>(1)</sup>。

第一に、1996年～1998年前半 (本考察における第三期に該当) においては、日本に「定着する外国人」イメージが、特集における雑多な在日外国人たちの実態報告という形をとって語られた。「外国人の定着化」というイメージは、同時にナショナル・アイデンティティの揺らぎと揺らぎへの不安の言説を伴うものであった。また、第三期においては、在日外国人の犯罪そのものをテーマとした記事がみられず、第二期において萌芽的にみられた＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な図式も現れていない。

第二に、1998年後半～1999年 (第四期の前期) になると、「強い主体」としての外国人イメージが現れる。ただし第四期前期においては、「強い主体」としての外国人たちは、大きな変容のプロセスにあるとされ、日本人や日本社会にとってよく分からないものとして語られる。ゆえに、彼らと日本社会や日本人との関係性がどうなるかも未知数かつ未確定であり、それがホスト社会 (日本社会) のマジョリティ (日本人) にとって肯定的な関係性となるか、否定的な関係性となるのかも、一義的に判断することができない。結果として＜有益な外国人＞と＜有害な外国人＞の二項対立的なイメージが、記事中において混在することとなった。また第三期においては消えていた在日外国人の犯罪をテーマとした記事が、＜有害な外国人＞イメージと結びつきつつ、再び記事中に現れるようになったのも第四期前期の特徴である。

では2000年以降の雑誌『S A P I O』において、＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的なイメージの混在状況は、どのようになっていったのだろうか。以下で検証していこう。

## II. 第四期中期&後期

### －＜有益な外国人＞から＜有害な外国人＞への焦点の移行－

(1) 第四期中期 (2000年～2001年前半)

－＜有益な外国人＞イメージにみる他者性の縮減－

第四期中期においては、前期に引き続き＜有害な外国人＞イメージと結びつきやすい在日外国人の犯罪に関する記事が散見される。しかし全体の基調としては、特集『『お雇い外国人』プロジェクト』 (2000年6月14日号) や特集「台頭する新ニッポン人 ポスト団塊世代からコリアン・ジャパニーズまで」の二つの特集記事にみられるように、＜有益な外国人＞イメージが優越している (表1を参照)。

ではこれらの特集記事のなかで、＜有益な外国人＞として具体的にどのような外国人が取り上げられ、どのように表象されているのだろうか。まず特集『『お雇い外国人』プロジェクト』をみてみよう。この特集の冒頭では、まず現在の日本を「律令の時代の第一の開国期」、「明治維新の第二の開国期」に続く「第三の開国期」にあるとした上で、「かつてない変化が日本を襲い、あちこちで閉塞感が漂っている」現状に対して、第一と第二の開国期にあった「お雇い外国人プロジェクト」の知恵を見直すことを提案する。そのうえで特集では、構想あるいは実例という形で、外交官としての「サッチャー外相」構想、サッカー日本代表監督の「トルシエ監督」、日本の大学における「外国人研究者」、経営者では日産の「ゴーン社長」らが挙げられる。特集の意図からも明らかのように、特集で想定されている雇うべき外国人とは、すべからず専門職や管理職、特殊な技能をもった技術職といった高い人的資本を持った者に限られている。

しかしながら実際に特集で挙げられた「お雇い外国人」の実例をみると、受け入れる側が必ずしも彼らをうまく活用できていない側面が強調されていたり、そもそも「お雇い外国人」といえるのか疑問なケースもある。例えば、トルシエ監督をとりあげた記事では、「有能な外国人を使いこなせないサッカー協会の無能ぶり」が強調される。あるいは日産の「ゴーン社長」の場合には、記事中で彼の「改革は日本型経営の改革につながり、その成功は『失われた10年』を取り戻す格好の機会」とされるが、彼は日産を買収した主体 (ルノー) から送り込まれた経営者であって、「お雇い外国人」という (日本側に雇われる) 客体とは言い難い側面がある。だが「お雇い外国人プロジェクト」の有効性は、特集記事全体では否定されていない。では何がプロジェクトの有効性を担保しているのか。それが「第一の開国期」にみられる「日本人は危機的状況に陥ったときに、外国人の力を借りて乗り切るというのが昔からの伝統的手法」という見解や、「第二の開国期」にみられる『『洋才』を受容しながら『和魂』を忘れなかった先達たちの『知性』』という見解であろう。要は、われわれ＝日本人がいまも引き継いでいるはずの「伝統」や「先達の知性」があるから、「第三の開国期」においても、われわれ＝日本人は「お雇い外国人」を上手に受け入れ、活用できるはずだ、という主張である。

表1 第四期中期の『SAPIO』在日外国人関連記事（2000年～2001年前半）

2000年	
6月14日	<特集>これが石原都知事が指摘した「TOKYO危険地帯」だ！潜入新宿・歌舞伎町は覚醒剤と拳銃が支配する街と化していた（溝口敦）
6月14日	<SHIMULATION REPORT>「お雇い外国人」プロジェクト 太平時代から明治維新までの日本の智恵を見直す
//	政治 「サッチャー外相」なら中国や北朝鮮の恫喝外交にも屈しない「ケンカ」を忘れた日本人政治家たちの無為無策には、もう愛想がつかた！（落合信彦）
//	古代 最初のお雇い外国人「渡来人」がいなかったら日本の歴史は200年遅れていた（井上満郎）
//	明治 「洋才」を受容しながら「和魂」を忘れなかった先達たちの「知性」（寺島実郎）
//	2002年W杯に勝ち残るにはトルシエクラスの外国人が必要だ ＊トルシエ監督の日本サッカーへの貢献 サッカー協会の無能ぶり（田村修一）
//	大学 日本の大学に横行する「階級主義」を外国人というカンフル剤で破壊せよ
//	なぜ、優秀な研究者は海外に流出してしまうのか（ピーター・フランクフル）
//	企業 系列も年功序列もぶっ飛ばせ 日産カルロス・ゴーンは驚進する 日本型経営の破壊者か、それとも救世主か？（片山修）
//	英語力 世界中から算数や理科の教師を呼べば、日本人の英語はうまくなる（大前研一）
//	近未来戦略 「過疎国家」転落を免れるには、今すぐ毎年10万人の有能移民を受け入れるしかない（石川好）
9月27日	中国人窃盗団は道路上の高級車を見て「札束ゴロゴロ」と豪語した 1999年は4万3000台に急増！ 自動車盗難の「手口」と「対策」を総点検！（田村建雄）
11月22日	<SIMULATION REPORT>台頭する新ニッポン人 ポスト団塊世代からコリアン・ジャパニーズまで
//	ベンチャー ボーダーレス、逆張り、スピード重視…これが不況に強い在日起業家パワーだ「ソフトバンク」孫正義、「シュリ」李鳳宇らに続く新世代も続々登場（辺真一）
//	新潮流 本名を公言する在日コリアン スポーツ新世代の「差別なんて！」サッカー、野球、ラグビーから国技・角界まで（李淳駟）
//	新民族主義 僕が朝鮮民族に誇りを持つように日本人も「日の丸」「君が代」を大事にして欲しい（徳山昌守）
//	在日新世代 「自分の国は韓国、住んでいる国は日本、そして世界を目指す」 一度も留学経験なしで国際コンクールに優勝した、13歳天才バイオリン少女が語った「民族の心」（梁美沙）
//	世代交代 在日コリアンが「コリア系日本人」の道を選ぶことで日本社会は多元化、活性化
//	する 外国人参政権より、特別永住者の日本国籍取得簡便化が急務だ（鄭大均）
//	世代間戦争 さよなら団塊の世代！21世紀のために、新ニッポン人よ、出でよ「チマチョゴリを着た日本人」が奇異にみられる時代に20世紀で終わりを告げるために（山崎浩一）
2001年	
5月9日	これが日本を救国させる“お雇い外国人”ドリームチーム内閣だ ゴア幹事長、オルブライト外相、ルービン財務相、ウェルチ経済省…（大前研一）

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』（各年版 紀伊国屋書店）を用いた記事検索（検索キーワード＝「外国人」）に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

そのうえで特集の最後に、「近未来戦略」としての「お雇い外国人」＝「毎年10万人の有能移民」の受け入れが主張されることになる。しかし、特集全体を支えている「昔うまくいったから今回もうまくいくはず」的な主張に、十分な根拠がないことは明らかである。先に＜有能な外国人＞イメージは＜有害な外国人＞イメージと同様に、「強い主体」としての外国人に関する表象の一つである、と論じた〔倉, 2007:108-109〕。だとすると「強い主体」である外国人との関係性は、その「強さ」ゆえに受け入れる側にとって、常に有益で活用可能な、予定調和的なものになる保証はどこにもない。にもかかわらず、そのような予定調和的な関係性が想定可能だとすれば、雑誌『SAPIO』

における＜有益な外国人＞イメージには、想定困難なものを想定可能にする別の何かがあると考えるべきであろう。

1990年代前半までの雑誌『SAPIO』の在日外国人言説を分析するなかで、筆者はすでに、共生あるいは混住すると想定されている外国人のイメージが、雑誌の中心的読者層である企業サラリーマン層にとって比較的同質性が高く、理解可能でコントロールも可能な外国人、すなわち他者性を縮減された外国人だった点を指摘した（第一期）〔倉, 2006:120-121〕。また＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という対立的な図式が萌芽的にみられた時、＜有益な外国人＞として挙げられていた在日コリアンのイメージが、ホスト社会にとっての有益性や活用可能性とともに、すでに経済的な成功を収めていて、過去の植民地支配の歴史や日本社会での民族差別を強調しない、いわば日本社会にとって「都合の良い」他者像でもあった点を指摘した（第二期）〔倉, 2006:126〕。

仮に第四期において再度現れた＜有益な外国人＞イメージが、上記のような特徴を有しているなら、彼らとホスト社会との間に予定調和的な関係を想定することは困難ではないはずである。実際に、第四期において在日コリアンを取り上げている特集「台頭する新ニッポン人 ポスト団塊世代からコリアン・ジャパニーズまで」で検証してみよう。

特集の冒頭では、在日コリアンに関して「イデオロギーにとらわれない新しいアイデンティティの模索がはじまっている」とし、「21世紀の日本を活性化させる彼ら『新ニッポン人』のパワーとその等身大の素顔に迫る」ことが特集の目的として示される。そのうえで、特集の各記事では、例えばソフトバンクの孫正義について、「民族や国籍にはあまりこだわらない。発想がもっとグローバルなのだ」と評価する。同じ記事では在日起業家について、「在日に生まれたゆえのハンデ」が、不況や逆境を乗り越えるだけの能力と精神力を備えさせたとする。また別の記事では、「民族差別」を意に介さず通名ではなく本名を名乗る若い在日コリアンのスポーツ選手像が紹介される。あるいは「日本人も『日の丸』『君が代』を大事にして欲しい」と語る在日のボクシング世界王者や、韓国とともに「住んでいる国・日本」への愛着も語る在日のバイオリン少女が取り上げられる。

これらの記事が総体として語っていることは、第二期の＜有益な外国人＞として在日コリアンを取り上げた特集にみられたものと－過去の歴史や国籍、民族差別にこだわらないという点で－同型のものといってよい。こういった相手として「都合の良い」（別言すれば、理解やコントロールが容易な他者性を縮減された）他者ならば、「パワー」を持つ「強い主体」であっても、彼らとの間に「等身大」で予定調和的な関係性を想定しやすい。

では同質性の高い他者像に関してはどうだろうか。特集記事のタイトルにあるように、取り上げられている新世代とされる在日コリアンが、「新ニッポン人」と表記されている点からもわかるように、彼らは「ニッポン人」といえる程に、「われわれ＝日本人」と同質性が高いと見なされている。他方で、「ニッポン人」というカタカナ表記が示すように、「われわれ＝日本人」との間には差異も存在する。そして、その差異こそ彼らの有用性や活用可能性をホスト社会にもたらしているものでもある。だが一方でその差異は、＜有益な外国人＞として、彼らとホスト社会（のマジョ

リティ）との予定調和的な関係性を脅かす程の異質性となって現れてはならない。〈有益な外国人〉であるためには、同質的でありすぎても異質的でありすぎても駄目なのである。

このような二律背反的な〈有益な外国人〉イメージを、特集において端的に示しているのが、「コリアン・ジャパニーズ」あるいは「コリア系日本人」に関する記述であろう。特集の中心の記事「在日コリアンが『コリア系日本人』の道を選ぶことで日本社会は多元化、活性化する」では、在日コリアンの世代交代が進み、日本生まれの世代が9割を超えるなか、日本社会において文化的な「異質性」を失い、本国への帰属意識に欠けている集団は、早く日本国籍を取得して、日本国民として統合されるべきであり、そうして「コリア系日本人」として生きるほうが、日本社会の多様化、活性化のためには有益であるとされる。ここでは「文化的な異質性を失った」外国人が、日本人になることで日本社会の多元化に貢献するという、一見矛盾した結論が述べられるが、その矛盾は〈有益な外国人〉イメージが抱える二律背反を、別な形で言い換えたものとして理解できる。

## （2）第四期後期（2001年後半～2002年前半）

### －〈有害な外国人〉イメージとわれわれ＝日本人の「弱い客体」化＝「被害者」化－

第四期の終わりになると、それまで存在していた〈有益な外国人〉イメージは後退し、代わりに〈有害な外国人〉イメージが前面に出てくるようになる。第四期の後期には、二つの特集記事が組まれている。一つは特集「戦慄の『凶悪中国人犯罪』」（2001年10月10日号）であり、もう一つが特集「これでいいのか！『犯罪天国』日本」（2002年3月13日号）である。いずれの特集でも、取り上げられている外国人犯罪の多くは中国人によるものか、北朝鮮が関連したものとなっている（表2参照）。

特集「戦慄の『凶悪中国人犯罪』」では、中国によって「日本に犯罪者」および「犯罪」の「輸出」が行われているとの認識枠組のもと、日本における中国人犯罪の「凶悪」イメージが強調されるとともに、「犯罪者に対して甘い社会」であり、中国に対して強く出ることができない日本の弱さや無力感も同時に強調されていく。一方で中国人によって繰り返される「凶悪犯罪」や中国人マフィアの「やりたい放題」というような「強い主体」としての〈有害な外国人〉イメージが、他方でこれらの犯罪に有効な対策を打ち出せない日本側の「主体としての弱さ」が、互いに対照をなす特集記事となっている。

そのような「主体としての弱さ」あるいは無力感がさらに進めば、日本社会や日本人はもはや主体ですらなく、純粋な「被害者」、すなわち「弱い客体」ということになるだろう。実際、次の特集「これでいいのか！『犯罪天国』日本」では、日本社会や日本人は「北朝鮮からの覚醒剤に青少年は溺れ、中国人犯罪者たちの強盗に脅える」被害者＝「弱い客体」として描かれるのである。特集記事の冒頭では、「日本列島では凶悪犯罪が横行、偽一万円札が乱舞し、覚醒剤が蔓延する」事態に、日本の治安当局は「対応しきれずに腕を拱いているかに見える」との指摘がなされる。各記事の結論部分でも、例えば、日本は「偽札、拳銃、覚醒剤、すべて」の「十字砲下<sup>マ</sup>」にあるとされ

表2 第四期後半の『SAPIO』在日外国人関連記事（2001年前半～2002年前半）

2001年 10月10日	<SIMULATION REPORT>戦慄の「凶悪中国人犯罪」「日本に犯罪者を輸出している」－北京からの驚愕情報を追う
//	手口「犯罪者に甘い社会」につけ込む凶悪中国人は“進化”し続ける 新たな潮流は「駆け込み型」犯罪と犯罪技術の「高度化」にあり（富坂聡）
//	国家犯罪 世界の治安当局者が注目する「犯罪輸出」と「北京の関与」 麻薬密売から武器輸出、地下銀行まで（浜田和幸）
//	図解 これが中国人「不法潜入ルート&全手口」だ “ベトナム難民偽装”から始まった（恵谷治）
//	プロファイル “ヒット・アンド・アウェイ”で凶悪犯罪を繰り返す中国人犯罪の不気味5年間で刑法犯検挙件数は2倍強に！彼らの手口を徹底分析（田村建雄）
//	抗争 日本のヤクザを殺しても食らう！中国マフィアのやりたい放題 新宿・歌舞伎町はいまや「中韓マフィア」の激突最前線（溝口敦）
2002年 3月13日	<SIMULATION REPORT>これでいいのか！「犯罪天国」日本 北朝鮮からの覚醒剤に青少年は溺れ、中国人犯罪者たちの強盗に脅える かつての治安国家はこんなに墮落した
//	新潮流 北朝鮮の覚醒剤を中国マフィアが運ぶ「中朝合作犯罪」の蠢動 福岡沖覚醒剤密輸事件で浮き彫りにされたあまりに「深い闇」（田村建雄）
//	治安 中国政府の「厳打キャンペーン」で在日中国人犯罪者の「合従連衡」が始まった「最近、朝鮮語を話す中国人が増えてきている（捜査関係者）」（富坂聡）
//	標的 米議会調査報告書で明かされる北朝鮮「麻薬ビジネス」の最大被害国は日本だ 年間1億ドルの外貨を稼ぐ「国家ビジネス」になぜこんなにノーマン気なのか（R、パール）
//	バンコク発 大量の覚醒剤原料を平壤に運ぶバンコク・ルートを掴んだ 日本を餌食にする東アジア・麻薬ネットワークの正体（渡辺也寸志）
//	三点セット 「大量偽1万円札事件」で分かった北朝鮮・台湾・香港マフィアの裏ネットはここまで進んでいる 覚醒剤だけではない膨張する闇社会の共闘作戦（溝口敦）
//	現地ルポ 地方私大の経営難が留学生の不法就労、犯罪予備軍化に拍車をかけている 中国人留学生200人失踪の酒田短大は冰山の一角（丹啓）
//	行政 「不法滞在者」根絶にはこの6つの改革案しかない ビザ発給の「高度情報化対応」「入管職員の増員」ほか（大貫啓行）
//	日中関係 密入国が「国策」となっている現実を注視して「友好30年」を洗い直せ 6兆円の援助で得たものが「トキ」「パンダ」「犯罪者」では、何のための日中関係か（落合信彦）
5月22日	犯罪・トラブル急増！ 入管をかいくぐる中国人ニセ留学生「書類偽造」の全手口を明かす 闇の留学斡旋組織の幹部が告白（田村建雄）

（注）大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』（各年版 紀伊国屋書店）を用いた記事検索（検索キーワード＝「外国人」）に加え、実際に雑誌記事を閲覧したうえで筆者が作成。

る。留学生の「不法滞在化」と「犯罪予備軍化」についての別の記事では、「少子化による大学危機に今のところ決定的な打開策はない」とされ、留学生の「不法就労の舞台装置」は回り続けると、ここでも外国人犯罪に有効な手を打てない日本側の無力感が示される。そして「かつての治安国家はこんなに墮落した」とされるのである。

以上のように、第四期後期の記事において、「外国人犯罪者」という〈有害な外国人〉イメージの「強い主体」化が進むなか、「われわれ＝日本人」の「弱い主体」化と、さらには「弱い客体」化＝「被害者」化が強調されたといったことがわかる。

### Ⅲ. 第五期－政策主体としてのネーションの再構築－

#### （1）第五期前期（2002年後半～2004年前半）

##### －「治安対策」としての「移民政策」と政策主体としてのネーションの回復－

第五期前期の雑誌『SAPIO』における外国人言説を特徴づけるキーワードは、何とんでも「治安」である。この時期の主要な特集記事とそのタイトルをみてみよう。特集「ニッポン『治安非常事態』を宣言する」（2002年11月13日号）、特集「日本の『国防&治安』大革命」（2003年9月3日号）、特集「犯罪大国ニッポン『新・闇の帝王たち』ITとグローバリゼーションを武器に日本の治安を脅かす新たな病巣を摘出する」（2004年5月26日号）といった記事に共通して見いだせるのが「治安」というキーワードであることが分かる（表3参照）。

一見すると、これらの特集記事は、「あまりに無防備な『犯罪天国』東京」（2002年11月13日号）や「犯罪大国ニッポン」（2004年5月26日号）といった前の第四期後期に出てきた外国人犯罪を取り上げた一連の特集記事と、「われわれ＝日本人」の「弱い客体」化＝「被害者」化が見られる点で変わらないようにもみえる。しかし詳細にみれば、両者の間には大きな相違が存在する。

第四期後期において、特集のタイトルに使われた単語をピックアップしてみよう。「戦慄」「溺れる」「脅える」「墮落した」。これらは自分たち以外の他の主体の行為、具体的には「外国人による犯罪」によって「戦慄」したり、「溺れ」たり、「脅え」たり、「墮落した」ことを示しており、外国人犯罪者という他者の行為の客体（「被害者」）として前面に出ているのは、日本人や日本社会ということになる<sup>(2)</sup>。ここまではすでに確認した。

次に、第五期前期の特集記事中の単語を同じようにピックアップしてみたい。「宣言する！」「大革命」「摘出する」。これらの主語になっているのが、ナショナルな主体としての「ニッポン」あるいは「日本」であることは想像に難くない。「治安非常事態」を力強く「宣言する！」主体としての「ニッポン」。「治安&国防」に「大革命」を起こす主体としての「日本」。「治安を脅かす新たな病巣を摘出」する主体としての「日本」。なぜ第四期後期以降の「弱い主体」あるいは「弱い客体」としての自己認識から、「治安非常事態」をコーテーションマーク付きで力強く「宣言する！」ような、「強い主体」としてのネーションが第五期に至って出現したのか。

第四期後期以降の記事における、「われわれ＝日本人」の「弱い主体」化、さらには「弱い客体」化＝「被害者」化は、同時に犯罪にかかわるヒトやモノ、カネ等のグローバルな移動をコントロール出来ない国家の能力に対する不全感や無力感をも伴うものだった（例えば、「急増する外国人犯罪の『残虐』『大胆』手口と、あまりに無防備な『犯罪天国』東京」「日本の治安を最悪にした不法入国外国人の犯罪を無気力国家と官僚が野放しにしている」2002年11月13日号、「中国人黒社会では、日本の警察は『小児科』とバカにされている」2004年5月26日号）。そのような不全感や無力感は、「強い主体」として自身を再建しようとする欲望を喚起することになる。では「強い主体」たらんとする欲望は、どのようにして実現されうるのだろうか。

大澤真幸は、E.バリバールの議論を参照しつつ、近年の人種主義の高まりを、三つの根源的生産要素－貨幣、労働力（人口）、土地（自然）－におけるグローバル化の進捗する速さの差と、その結果、これらが国家の制御を越えてしまう程度の差をもとに説明している。それによれば、最も速くグローバル化が進み、国家の制御を簡単に越えてしまうのが貨幣の領域である。他方、労働力（人口）でもグローバル化は進むし、非合法移民の存在が示すように国家の制御を越えてもいるが、貨幣の流れを制御するのと比べれば、人口の流れを制御するのは、はるかに簡単である。グローバ

表3 第五期前期の『SAPIO』在日外国人関連記事（2002年後半～2004年前半）

2002年	
11月13日	<SIMULATION REPORT>ニッポン「治安非常事態」を宣言する！ 急増する外国人犯罪の「残虐」「大胆」手口と、あまりに無防備な「犯罪天国」東京の実態
〃	危機 日本の治安を最悪にした不法入国外国人の犯罪を無気力国家と官僚が野放しにしている 石原慎太郎都知事の緊急対策を傾聴せよ（石原慎太郎）
〃	事件簿 留学生グループの「冷血殺人」の背後にネットでカモを捜す犯罪大予備軍あり「大分県身元引受人殺害」から「ホテル嬢メック刺し殺人」まで（田村建雄）
〃	抗争 「東北系vsヤクザ」の風林会館事件勃発で「アジア最大の歓楽街」歌舞伎町は殺気が漲っている 北京、上海、福建、華僑系につぐ最も危険な中国人グループが出現（李小牧）
〃	知能化 中国人ピッキング窃盗団が進化して最後の荒稼ぎに殺到してくる 「狙いは一人暮らしの女性」－①完全分業②何でも換金③情報力強化で再び活性化した（富坂聡）
〃	性犯罪 錦糸町「外国人街娼通り」で見た日本市場は人種の坩堝だった ここでも昨年からタイ人に代わり中国人が一躍トップに躍り出た！（ダニエル・谷）
〃	地下経済 いまやGDPの4% アングラマネーは外国人犯罪急増で欧米並みへ真っしぐら 覚醒剤1兆4100億円、自動車窃盗1100億円ほか（門倉貴史）
〃	シャブ天国 現役麻薬捜査官が実態告発 麻薬汚染列島「戦慄の数字」 200万人以上の乱用者をシャブするヤクザ、イラン人、北朝鮮（麻生幾）
〃	内幕 ようやく青写真が見えてきた警察庁「組織対策局」は外国人犯罪組織への宣戦布告だ 不良外国人を水際で防ぐ「移民対策」が急務だ
11月27日	<SIMULATION REPORT>中華帝国「人口爆発の大厄」 まもなく最大の在日外国人グループに－文化も経済も大激変
〃	表裏一体 旧態依然の中国人観を改めなければ「100万人の在日中国人」に対処できない 実業家、エリート、犯罪者、すべてがつながり一体化している
2003年	
5月28日	犯罪予備軍「突撃密航」「留学生崩れ」 日本の不況が彼らの「犯罪圧」を高めている 歌舞伎町の一斉摘発、グループトップの相次ぐ逮捕の裏側で（田村建雄）
6月25日	仕事師たちの平成裏起業 3回 中国エステ 年商7億円を棒に振り「歌舞伎町の帝王」になりそこねた中国人の「強欲」 ＊恐喝未遂、風営法違反などで逮捕された丁東（溝口敦）
9月3日	<SIMULATION REPORT>日本の「国防&治安」大革命
〃	外国人犯罪 元兵士までメンバーに！ 台頭する「イランマフィア」が東京の治安を揺るがす ＊警視庁&入管「東京浄化作戦」最前線（田村建雄）
11月12日	<SPECIAL REPORT>中国黒社会の報復
〃	中国人による中国人犯罪現場報告 第1回 深層 留学生を凶悪犯罪者に変える暴力団と在日黒社会という名の「磁場」（李小牧）
〃	トレンド 山形・母娘、大分・保証人、福岡一家殺害… 中国・東北出身者「凶悪化の方程式」（田村建雄）
〃	国境の島 密航・密輸組織の「通り道」 八重山列島海域を徹底監視せよ（山本皓一）
〃	制覇 「密航」「麻薬」「売春」で世界の繁華街を席卷する中国黒社会200万人の「次なる標的」（石田収）

11月26日	中国人による中国人犯罪現場報告 第2回 日本の刑務所は犯罪の温床になり下がっているーピッキング学校もある！犯罪天国ニッポンのウラのウラー (李小牧)
12月10日	中国人による中国人犯罪現場報告 第3回 銀行ばかりか病院、美容室も、増殖する中国人「地下社会」の闇ー不法滞在者や犯罪グループが頼りにする「アンダーグラウンドの世界」ー (李小牧)
12月24日	中国人による中国人犯罪現場報告 最終回 偽装結婚、売春、美人局、そしてギャンブル、麻薬に溺れる 中国人女性たちがはまる「犯罪と転落のサイクル」 (李小牧)
2004年	
2月25日	哀国愛国 唯我壽論 vol.28 小泉さん、いっそ「憲法9条」も「不法滞在外国人」も「新成人」もイラクに不法投棄してきたらいかか (ビートたけし)
3月30日	これは事件だ 381回 白昼の銀座で35億円の宝石強盗 無理を重ねてきた街は強盗の宝の山か (神田裕司)
5月26日	<SIMULATION REPORT>犯罪大国ニッポン「新・闇の帝王たち」I Tとグローバリゼーションを武器に日本の治安を脅かす新たな病巣を抽出する
//	深層 ついに逮捕！「食肉の帝王」ハンナグループ総帥 浅田満を支えた政官財暴コネクション 完全犯罪を自任した男が最後にあたった毒饅頭 (溝口敦)
//	最前線 数十兆円の闇マネーを海外に飛ばすハイテク・ロンダリングの手口 警察・国税の捜査を阻む「海外」「語学」「金融商品」のカベ (伊藤博敏)
//	黒社会 福建人を駆使し歌舞伎町を牛耳る東北人のボスは残留孤児暴走族の元リーダー 中国人黒社会では、日本の警察は「小児科」とバカにされている (陳放)
//	リサイクル 「中国人ブローカー」が跳梁跋扈する1兆円市場！産廃コネクションの新展開 ゴミの山が宝を生むーリサイクル・ビジネスを牛耳るアウトローたち (石渡正佳)
//	北朝鮮 盗難車密輸事件と沈没工作船携帯電話を結ぶ在日韓国人の「正体」 闇から浮上した北朝鮮犯罪コネクションを追う [前編] (田村建雄)
//	日中比較 日本の刑務所は再犯防止どころか次なる犯罪の温床となっている！ 収容中の中国人犯罪者が告白！ (王進忠)
6月9日	「謎の在日韓国人」と「工作船」をつなぐ点と線から「北朝鮮麻薬ビジネス」の現場が見えてきた 闇から浮上した北朝鮮犯罪コネクションを追う [後編] (田村建雄)

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』(各年版 紀伊国屋書店)を用いた記事検索 (検索キーワード = 「外国人」) に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

ル化のもとでは、本来、全能であるべき国民と国家の「無力」は、とりわけ貨幣の領域で顕在化するのだが、その「無力」さは他の生産要素、特に人口の領域において再確立される「全能性」によって補償されることになる。なぜなら、国民と国家の「無力」さがもたらす強い不安から、国民は自身の安全性を確保するに十分な能力を持っていることを示すよう国家に要求するが、そのような要求を貨幣の領域で実現することが不可能である以上、代わりに人口の領域で、具体的には「国民の共同体へと侵入しようとする移民を国家が規制することができる」ことを示すことへの要求が著しく高まることになるからである [大澤, 2007:604-605]。第五期の雑誌『S A P I O』の記事中に現れた、「外国人犯罪」に対して「治安対策」を担うべき、「強い (政策) 主体」としてのネーションの回復、再構築もまた同じ機制が作用した結果として捉えることが出来る。

では「外国人犯罪」に対して「治安対策」を担う「強い (政策) 主体」としてのネーションは、いかなる「治安」あるいはセキュリティの言説を通じて再構築されることになるのだろうか。第五期前期の雑誌『S A P I O』の記事中においては、必ずしも具体的な政策が明示されているわけではない。しかし、政策が語られる際の枠組について、特徴的な点を指摘することが出来る。

まず、2003年11月13日号の特集は、冒頭で「かつて世界一安全な先進国といわれた日本の治安話は地に墜ち、盛り場だけでなく、一般人の家庭や学校のすぐ側まで、危機は迫っている」としながら、「いたずらな外国人排斥論ではなく、国家としての抜本的な移民対策が急務だ」との主張がなされる。同じ特集における別の記事では、治安悪化の責任を「不法入国外国人の犯罪」とそれを野放しにした「無気力国家と官僚」に帰しているが、記事中で「最大の外国人犯罪対策」として示されるのが、「国策として合法的に外国人の単純労働者を入れる」(その代わりに不法入国外国人は徹底して取り締まる) 政策であった。

このことは外国人犯罪への対策 (= 治安対策) のための手段として、移民政策、外国人政策を位置づけたものであろう。同様の見解は、同じ特集中の記事「ようやく青写真が見えてきた警察庁『組織対策局』は外国人犯罪組織への宣戦布告だ 不良外国人を水際で防ぐ『移民対策』が不可欠だ」においても共有されている。さらに、記事「表裏一体 旧態依然の中国人観を改めなければ『100万人の在日中国人』に対処できない」(2002年11月27日号) や記事「犯罪予備軍『突撃密航』『留学生崩れ』日本の不況が彼らの『犯罪圧』を高めている」(2003年5月28日号) にみられるように、「実業家、エリート、犯罪者、すべてつながり一体と化している」(2002年11月27日号)、「犯罪予備軍」(2003年5月28日号) といった認識は、外国人犯罪者はもちろん、そうでない外国人をも含めて同じく一種のリスク源とみなし、「治安対策」としての移民政策の対象 (客体) にしていくものである。さらにその論理的な帰結として、「外務省、警察庁型に、文部科学省、厚生労働省型を加えた総合的な対応」(2002年11月27日号) を要請するものであり、外国人の出入国、滞在、就労から生活全般に至るまでを監視の対象とするとともに、リスク源とみなされた特定の国籍の外国人やエスニック集団を排除の対象にしていくことにもなるだろう<sup>(3)</sup>。

## (2) 第五期後期 (2004年後半～現在) - 二項対立的な図式で語られる移民政策 -

第五期後期の雑誌『S A P I O』における外国人言説を特徴づけるものは、移民政策をめぐる論争的な特集記事のなかに見いだすことができる。これに先行した前期の記事では、治安対策の一環として移民政策を語ることによって、「弱い客体」= 「被害者」である自身の現状を変革すべき政策主体として、ナショナルな主体 (ネーション= 国民) が回復、再構築されていった点を指摘した。だとすれば政策主体としてのネーションは、まさに政策主体であることを日々確認するためにも、移民政策をめぐるいわば「国民」的論争を欲することになる。

ではどのような形で、「国民」的な移民をめぐる論争が雑誌記事上で展開していったのか。第五期後期の最初の特集「外国人『入れる』VS『入れない』大論争」(2004年11月14日号) は、「参政権から不法就労まで日本社会を揺るがす大問題を洗い直す」と銘打ち、外国人労働者の受け入れをめぐる争点について、「単に経済だけでなく将来の安全保障戦略を見据えた上でのベストの“解”はどこにあるのか、総力特集する」ことを謳う。特徴的なのは、第一に移民政策をめぐる特集が、「入れる」VS「入れない」という二項対立的な図式にそって展開されていること、第二に富の生

産にかかわる生産力や労働力の不足という経済的な利害関心ばかりでなく、安全保障といったセキュリティへの利害関心から移民政策を考えるという点である。

同様の図式は、他の第五期後期の特集や記事にもみられる。記事「移民政策 外国人労働者や移民の受け入れは拙速な議論で進められるべきではない」（2006年1月25日号）では、「日本に突きつけられた『国家百年の計』」として、「治安維持のための『鎖国』か、労働力補完のための『開放』か」というやはり二項対立的な図式（選択肢）とともに、「労働力補完」という経済的利害とともに「治安維持」というセキュリティへの関心も同時に示される。最近の特集「『移民』は救世主か問題児か」も二項対立的な図式において共通であるとともに、移民「先進国」の現状紹介として各国の様々な移民が絡んだ犯罪や治安問題が語られる。

これらの特集記事にみられる移民政策をめぐる二項対立的な図式が、在日外国人イメージにみられた例の二項対立的な図式（＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞）と重なることを読みとるのは容易である。すなわち＜有益な外国人＞に重なるのは「入れる」「開放」「救世主」であり、＜有害な外国人＞に重なるのが「入れない」「鎖国」「問題児」である。また移民政策にみられた二項対立の一方が、外国人犯罪や治安問題と強く結びつきイメージされてきた＜有害な外国人＞と重なり合うものである以上、移民政策をめぐる論争的な特集や記事が治安やセキュリティへの関心を主要な争点としてきたことも理解できる。

要するに第五期後期における移民政策をめぐる論争的な特集記事とは、それ以前から続いてきた＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な外国人イメージを、治安（セキュリティ）政策の対象（客体）として、移民政策というスクリーンに投影した時に現れる、同型の二項対立的な政策像なのである。

また二項対立的な移民政策を焦点とする論争は、論争における個々の争点や内容では異なる見解の対立という形をとりながら、論争それ自体の暗黙の前提を確認しあうことにもなる。なぜなら「入れる」か「入れないか」、「開国」か「鎖国」といった二項対立は、暗黙のうちに移民を受け入れるか否か、国境を移民に開放するか否かを決定し、政策として執行する主体が受入国の「われわれ＝日本人」側にあることを前提とした議論だからである。

このようにして政策主体としての「われわれ＝日本人」というナショナルな主体が一旦確認されれば、移民を「救世主か問題児か」（2008年7月9日号）、換言すれば＜有益な外国人＞か＜有害な外国人＞か判別することも容易となる。なぜならナショナルな主体と結びつく特定の視座が、移民を判別する基準を、例えば「国益になるか否か」という形で具体的に付与してくれるからである。2008年7月9日号の特集における記事「『白豪主義』も『多文化主義』も根は同じ『国益になる移民』の冷徹な選別」は、オーストラリアにおける「国益となる移民」を選別する具体的な「選別基準」を、日本も同様に「移民受け入れ」で「設定しなければならない」と主張する。すなわち移民を＜有益＞か＜有害＞か選別する基準は、国民（とその利害）によって設定されるべきだとされるのである。

表4 第五期後期の『SAPIO』在日外国人関連記事（2004年後半～現在）

2004年 11月24日	<SIMULATION REPORT>外国人「入れる」VS「入れない」大論争 参政権から不法滞在まで 日本社会を揺るがす大問題を洗い直す
//	外庄 「2050年には日本の人口の4割は移民になる」と恫喝したIMF国際通貨基金報告書の「真意」「容認派」「否定派」を折衷する「日系移民受け入れ拡大論」が浮上した背景を読み（高濱賛）
//	現場 悪徳業者の食い物にされた4万人の中国人研修生が犯罪予備軍と化している この外国人労働者の「ブラック・マーケット」をいつまで放置しておくのか（李小牧）
//	容認論 「経済移民」受け入れは「ドイツの失敗」ではなく「シンガポールの成功」に学べ 現地での「出稼ぎ学校」建設、「混住」ではなく「分住」、「妊娠したら帰国」の契約ほかー日本人と外国人が「共存する方法」はこんなにある（日下公人）
//	外国人への参政権付与はあくまで「憲法違反」である（百地章）
//	共栄圏 「人の移動」というダイナミズムを受け入れることで新たな安全保障体制を構築せよ EUを超える「東アジア共同体」創設の鍵とは？（進藤栄一）
//	選択 プロフェッショナル（看護師・介護士ほか）は「開放」、単純労働は「閉鎖」の日本「オリジナル・モデル」を目指せ 「教育」「社会保障」「地域コミュニティ」整備で治安は守れる（浦田秀次郎）
//	暗闘 「外国人単純労働者受け入れ答申」で激震！霞ヶ関大バトルの「本音と建前」 法務、警察、文科、外務、地方自治体それぞれの思惑が入り乱れて…（田村建雄）
2005年 4月13日	<SIMULATION REPORT>中国「解体」25の亀裂
//	モラル崩壊 「ピッキング村」まで登場！？“要銭不要命”の中国人「換金主義」はここまできた もはや日本人を食いものにする「犯罪ビジネス」は一族・一村の「生業」となった（森田靖郎）
6月8日	<SIMULATION REPORT>「治安崩壊」最深处からの報告 外国人・性犯罪からサイバー・アタックまで「安全大国」日本再生への処方箋はこれだ
//	最前線 「会社化」「地方化」「ハイテク化」がキーワード ハゲタカ中国人強盗団シノギの“全手口” 石原都知事の「歌舞伎町浄化作戦」はかえって火に油を注ぐだけなのか（李小牧）
//	人身売買 米国務省から「監視対象国」に指定された「売春天国」ニッポンの真実 日本政府の「人身取引対策のための行動計画」と「刑法改正」、「興行ビザ厳格化」は奏功するか（溝口敦）
9月28日	現在の留学生政策では「日本は冷たい」と失望されてしまう 魅力なき教育プログラムに冷淡受け入れ態勢（木村孟）
2006年 1月25日	<SIMULATION REPORT>大予言！「上流国家」「下流国家」
//	移民政策 外国人労働者や移民の受け入れは拙速な議論で進められるべきではない 治安維持のための「鎖国」か、労働力補完のための「開放」かー日本に突きつけられた「国家百年の計」（佐野哲）
3月22日	<SPECIAL REPORT>朝鮮人からインド人まで、いまや全人口の2%超 「在日パワー」激変絵図
//	在日朝鮮人 巨額債務628億円を背負い構成員も10分の1に！ 本国にも見捨てられた「朝鮮総連」の断末魔 最後に残る道は「民団」との統一しかないとの悲観論も…（野村旗守）
//	帰属 「韓流」「嫌韓流」ブームの狭間で揺れる在日アイデンティティの危機 韓国籍、朝鮮籍のままではもはや自分を説明できない（鄭大均）
//	ニュー・コミュニティー 地域社会と共存する「江戸川インド人社会」に「外国人共栄」の知恵を学べ 5年間で4倍ー日本人流入するインド人IT技術者たちのベットタウンが西葛西に出現（山下柚実）

4月12日	<p>主役交代 中国・韓国系摘発強化で台頭 ナイジェリアン・マフィアが歌舞伎町を席卷する 麻薬密売で世界的にも要注目！（田村建雄）</p> <p>風俗 「バブル」「ベレストロイカ」「イラク戦争」で乱高下する「外国人パブ興亡30年史 フィリピン・パブ全盛時代から多国籍の時代へ（多椋正芳）</p> <p>&lt;SIMULATION REPORT&gt;世界を揺るがす中国「犯罪黒書」</p> <p>上陸胡錦濤・中国の「走出去」政策で日本全国に「新中華街」が続々誕生する 場当たりのなチャイナ・タウンの出現が新たな「犯罪の温床」をもたらすことにならないか(山村明義)</p>
2007年	
3月14日	<p>蠢く！中国対日特務工作白書 第2部 6・最終回 日本の大学の産官学共同プロジェクトの成果が中国に盗まれた！ ＊中国人留学生が関与（袁翔鳴）</p>
9月26日	<p>&lt;SIMULATION REPORT&gt; 増殖する「中国毒」</p> <p>犯罪輸出「蛇頭」源流の寒村は日本からの「戦利品」で豪華絢爛な「ピッキング村」に変身していた 実行犯を陰で動かす元黒幕を福建省で直撃（森田靖郎）</p>
2008年	
1月4日	<p>外国人参政権を訴える在日コリアンだが、実は“特権”だらけ</p>
〃	<p>蝕む！ 中国黒社会「日本占領」第1部 暴力団も使い回す巨大強盗団の首魁 1回 ＊連載開始（袁翔鳴）</p>
〃	<p>国会議員75名が「賛成」！ 日本の安全保障を脅かす「外国人参政権法案」成立がそこまで迫っている 在日本大韓国民団による「全国会議員アンケート」を独占入手（西村幸祐）</p>
2月13日	<p>蝕む！ 中国黒社会「日本占領」第1部 暴力団も使い回す巨大強盗団の首魁（その3）（袁翔鳴）</p>
2月27日	<p>蝕む！ 中国黒社会「日本占領」第2部 日本の裏社会で“開業”する「中国地下銀行」の巨大資産（その1）（袁翔鳴）</p>
3月26日	<p>戦後タブー 住民税半減、所得税・固定資産税も減免—在日コリアン“歪んだ優遇税制”を撤廃せよ 外国人参政権よりこちらの議論が先だ（呉善花）</p>
4月23日	<p>蝕む！ 中国黒社会「日本占領」第2部 日本の裏社会で“開業”する「中国地下銀行」の巨大資産（その5）（袁翔鳴）</p>
5月28日	<p>&lt;SIMULATION REPORT&gt;世界を浸食する「闇社会」の台頭</p> <p>潜入ルポ 「中国人ジャブ・パーティ」「ロシア人惨殺死体」ほか在日外国人「治外法権の現場」を行く 見切り発車した外国人労働者受け入れが新たな問題と呼んでいる（本誌編集部）</p>
7月9日	<p>&lt;SPECIAL REPORT&gt;「移民」は救世主か問題児か 移民「先進国」の現状から「労働鎖国のすすめ」までを徹底検証</p>
〃	<p>「最強国家ニッポン」の設計図特別版 日本経済は「第2の開国」を敢行し多国籍ドリームチームを引き入れる シンガポール、香港、ドバイ—21世紀に繁栄するのは移民国家だ（大前研一）</p>
〃	<p>反対論 大量失業、国情不安定化を防ぐために「労働鎖国」を敷くべきである イスラム教徒のインドネシア人を大量に受け入れる政府の政治的無知（西尾幹二）</p>
〃	<p>世界の移民政策「軋轢と苦渋」</p> <p>復権する白人至上主義「KKK」の標的は黒人からヒスパニックへ（池原麻里子）</p> <p>欧州屈指のイスラム移民大国が抱える2世代の「少年ギャング化」（熊谷徹）</p> <p>欧州で最も移民に寛容な国で大ブーム 中国人の「ニセ日本人売春」ビジネス（宮下洋一）</p> <p>「白豪主義」も「多文化主義」も根は同じ「国益になる移民」の冷徹な選別（浅川晃広）</p>
〃	<p>歪み 時給800円の単純労働で3年後に強制帰国「外国人研修制度」の奇烈現場 日本人が嫌う3K労働に逃亡者急増中—この制度は早急に見直しが必要だ（井出康博）</p>
〃	<p>試金石 崩壊寸前のニッポンの医療現場で勃発した外国人ナースVS日本看護協会「白衣の戦い」インドネシア・フィリピン人看護師は「賃金低下圧力」か「救世主」か（多椋正芳 &amp; 本誌取材班）</p>
8月6日	<p>&lt;SPECIAL REPORT&gt; 「21世紀の国共合作」が始まった</p> <p>スパイ 在日中国人留学生が暗躍する特務工作に日本の血税1兆円が使われる</p> <p>「中台統一」宣伝から「先端技術」取得まで（山村明義）</p>

(注)大宅社一文庫『大宅社一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』（各年版 紀伊国屋書店）を用いた記事検索（検索キーワード＝「外国人」）に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

ここまで新たな移民に対する政策論争をあつかった特集記事を見てきた。では、既に日本に流入、定着してきたとされる移民や外国人に関する記事はどうであろうか。在日外国人の現状をレポートしている特集「朝鮮人からインド人まで、いまや全人口の2%超『在日パワー』激変絵図」（2006年3月22日号）は、特集の目的として、日本を「多民族国家」と呼ぶのは言い過ぎとしつつも、「同時に、麻薬、売春、殺人などの外国人犯罪だけでなく、外国人子弟の教育問題や外国人参政権など、移民受け入れ国家が経験してきた問題すべてに、日本は直面している」との認識から、「まず、在日外国人社会に何が起きているのか。それを知ることが先決」として、「日本人が知らない日本の深奥をレポートする」ことを宣言する。

よく分からない在日外国人をまずは知ることを目的とする同様の実態報告中心の特集は、例えば1990年代後半の第三期の雑誌『S A P I O』においてもみられたものだった。ただし第三期においては、ナショナル・アイデンティティの揺らぎを強調する言説のなかで、レポート内容も雑多な在日外国人の実態報告に近いものであり、そこから何か具体的な政策への指向性が読みとれるものとはなっていないかった〔倉, 2007:105-108〕。

それとは違って、政策主体としてのネーションの復活、再構築を経た第五期の2006年3月22日号の特集では、記事の内容は雑多な在日外国人の実態報告ではなく、日本人・日本社会にとって「有益か否か」「有害か否か」という観点から構成されている。

例えば最近流入してきた外国人では、東京の西葛西に出来たインド人IT技術者とその家族からなるインド人街と、新宿・歌舞伎町で台頭してきたとされるナイジェリア人マフィアが取り上げられる。前者は、「日本人と外国人の共存の成功パターン」とされ、記事は「IT技術を駆使し、今後、日本企業の根幹を支えていくであろうインド人。日本語を学び、交流する努力をし、日本人と同じように税金を納める彼ら。日本での生活を安心して送るために、自治体や政府はどのような支援ができるか。江戸川インド人会の声に耳を傾ける時が来ている」と結ばれる。

対する新宿・歌舞伎町のナイジェリア人マフィアは、「中国・韓国系摘発強化で台頭」したとされ、「麻薬密売で世界的にも要注目」の外国人グループとして記事中では取り上げられる。また、日本の警察は常に彼らの動向を監視し、場合によっては摘発を通じて排除することが、警察関係者の証言として指摘される。そして中国系に代わって「イラン人やアフリカ系出身者の流入でより強力な犯罪集団が形成される可能性」が示唆される。

IT技術者のインド人とその家族が、<有益な外国人>の事例として、ナイジェリア人マフィアが<有害な外国人>の事例として、第三期の記事にみられたような雑多な在日外国人の事例の列挙ではなく、極めて対照的な形で特集に組み込まれていることは明らかであろう。さらに興味深いのは、在日コリアン関連の記事も含めて、各在日外国人の事例を取り上げた記事が、移民や外国人に対する特定の政策（あるいは政策への指向性）をも同時に語っていることである。在日コリアンの場合には、「在日に参政権」を与えることへの否定的な評価が語られる。インド人IT技術者とその家族へは「自治体や政府」による「支援」の必要性が語られる。ナイジェリア人マフィアの



場合には、警察等の治安機関による監視と排除の対象であることが語られる。このように特定の政策に結びつけられつつ在日外国人の実態がレポートされていること自体、先述のように第三期には見られなかった特徴であり、そのような記事を第五期において可能にしたのが、政策主体としてのネーションの復活、再構築だったと考えることが出来るだろう<sup>(4)</sup>。

## VI. おわりに

最後に、『S A P I O』が創刊された1989年から2008年までの約20年間の同誌における在日外国人に関する言説の変遷を、本稿における分析上の時期区分にそって、改めて概観することでまとめて代えたい。

第一期（1989年～1993年）においては、当初「われわれ＝日本人」というナショナルな主体による「混住社会ニッポン」の実現が語られていたが、そこで混住あるいは共存すると想定されていた「外国人」とは、『S A P I O』の主要な読者層である企業サラリーマン層からみて同質性が高く、理解可能でコントロール可能な客体、いわば他者性を縮減された外国人であった。しかし「外国人犯罪」に関する記事のなかで、「外国人」＝加害者（主体）／「日本人」＝被害者（客体）という図式が強まっていき、「外国人」を理解やコントロールが困難な他者性を孕んだ主体として表象するにつれて、「混住社会ニッポン」を構想する政策主体としての「われわれ＝日本人」という言説は後退し、やがて誌面上から消えてしまう。

それにかわって、第二期（1994年～1995年）になって誌面上に現れたのが、日本社会にとって＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な外国人表象であった。いずれも外国人は「強い主体」として表象されており、その「強さ」が「われわれ＝日本人」にとって有用で活用可能なものとしてポジティブにイメージされれば＜有益な外国人＞に、外国人犯罪のように被害をもたらすネガティブなものとしてイメージされれば＜有害な外国人＞となる。

第三期（1996年～1998年前半）では、日本に「定着する外国人」言説が、具体的には雑多な在日外国人たちの実態報告という形で語られた。「定着化する外国人」というイメージは、同時にナショナル・アイデンティティ（われわれ＝日本人）の揺らぎと不安の言説を伴うものであった。また在日外国人の犯罪そのものをテーマとした記事がみられず、第二期に萌芽的にみられた＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な図式も現れていない。これはナショナルな主体（われわれ＝日本人）が揺らいでいるとされる以上、何が誰にとって＜有益＞か否か、＜有害＞か否かを（例えば「国益」といった形で）判断する審級が確保され難いためであった。

第四期（1998年後半～2002年前半）に入ると、第三期になって記事から消えていた外国人犯罪をテーマとした記事が、＜有害な外国人＞イメージと結びつきつつ再び現れるようになり、＜有益な外国人＞イメージとともに、記事中に混在するようになる。やがてこの混在状況のなかから、＜有益な外国人＞イメージをメインとした特集が組まれるようになった。特集記事における＜有益な外国

人＞は、危機に直面する日本社会に活力をもたらす「強い主体」として表象されているが、同時にそのイメージは日本にとって「都合のよい」（理解やコントロールが容易という意味で他者性を縮減された）他者であり、また「新ニッポン人」と見なされるように、同質的な側面を持つと同時に異質な側面も併せ持つ、外国人であって外国人でないような他者なのであった。このような他者ならば、仮に「強い主体」であっても、「われわれ＝日本人」は安心して彼らと共存するとともに、彼らを十分に活用することが出来るのだ。第四期も終盤になると、雑誌記事における焦点は＜有益な外国人＞から＜有害な外国人＞に移行していく。そこでは「外国人犯罪者」が「加害者」という「強い主体」としてイメージされていく一方、「われわれ＝日本人」側は、「犯罪天国」という現状に有効な対策をうてない「弱い主体」、さらには純粋な「被害者」＝「弱い客体」として語られていった。

「強い主体」＝「加害者」としての外国人／「弱い客体」＝「被害者」としての日本人、という言説は、他方で「強い主体」として自身を回復せんとする欲望を喚起する。それが第五期（2002年後半～現在）において、「治安」というキーワードとして記事中に現れる。すなわち「外国人犯罪」に対して、治安を回復する「強い（政策）主体」としてのネーションの回復、再構築が力強く語られるのである。そのうえで治安対策（外国人犯罪対策）の手段として、移民や外国人を監視・管理し、リスク源と見なせば排除する形での移民政策が位置づけられていく。また第五期の記事では、（移民を）「入れる」VS「入れない」、（外国人に門戸を）「開放」VS「鎖国」といった形で、二項対立的な図式で移民政策が語られることになる。これは＜有益な外国人＞－＜有害な外国人＞という二項対立的な外国人表象を、治安政策の対象（客体）として、移民政策に投影した時に現れる、同じく二項対立的な政策像と考えることが出来る。こうしてナショナルな主体（われわれ＝日本人）は、いまや「国益」にそって＜有益な移民＞と＜有害な移民＞を選別し、監視し、（有害とみなした場合には）排除していく政策主体としても再構築されていくことになる。

ここにいたって第一期の雑誌『S A P I O』において想定されていた「混住社会ニッポン」を実現する政策主体としての「われわれ＝日本人」は、第三期におけるナショナルな主体の揺らぎを経て、いま再び復活することになったのである。

## <注>

- (1) 1990年代前半までの雑誌『S A P I O』における在日外国人に関する言説については、[倉, 2006]において分析した。
- (2) このことは外国人犯罪者の被害者が日本人のみであることを意味しない。外国人犯罪の被害者は、実は同じ国籍やエスニック集団に属する「同胞」だったり、国籍やエスニック集団は違っても、就労や居住をする生活圏が重なり合う外国人の「隣人」たちである場合も多い。それ

は比較的好く知っている「同胞」や「隣人」をターゲットにした方が、近隣でもなくよく分からない場所で日本人をターゲットにするより犯行が容易だということもある。さらに、外国人のなかには超過滞在（オーバーステイ）であったり、資格外活動に従事しているため、たとえ被害者であっても警察への通報を躊躇する者が多いので、犯行が発覚しづらく検挙されにくいという事情もあろう。

これらのことは、実は雑誌『S A P I O』の記事のなかでも指摘されてきたことである。しかし、記事（特に本文より記事や特集のタイトル）においては、日本人が被害者である側面が強調されている場合が多い（例えば、記事「外国人犯罪の日本人被害者急増」1999年1月13日号）。

- (3) すでにお気づきだとは思いますが、特に第四期から第五期の雑誌『S A P I O』において、リスク源とみなされ、監視や排除の対象となりうる国籍あるいはエスニック集団の最たるものが、「中国人」あるいは「中国系」移民であることは間違いない。しかし、他の国籍やエスニック集団に属する移民、外国人にも常にそういった対象になる可能性があるというべきであろう。かつては（あるいは現在も）「イラン人」がそうであったし、第五期後期の記事「主役交代 中国・韓国系摘発強化で台頭 ナイジェリアン・マフィアが歌舞伎町を席卷する 麻薬密売で世界的にも要注目！」（2006年3月22日号）にあるように、例えば歌舞伎町に代表される特定の場所での定点観測的な記事群によって、常に新しいグループがリスク源として認知され、まなざしを向けられていくのである。
- (4) 政策主体としてのネーションの復活、再構築と、第五期後期の記事における外国人言説の関連については、他にも指摘できることがある。例えば、記事「潜入ルポ 『中国人シャブ・パーティ』『ロシア人惨殺死体』ほか在日外国人『治外法権の現場』に行く」（2008年5月28日号）は、「外国人コミュニティができていく中で、一部がアングラ化し犯罪の温床になっていることも紛れもない事実」だと述べ、「外国人がつくるコミュニティが地域住民との軋轢を生むケースは少なくない。地域から離れて独立した社会は警察や行政の監視からも離れ、アングラ化する場合もある」として、日本各地の「外国人街」の実態を「治外法権」というキーワードでレポートしていく。「治外法権」で「犯罪の温床」といった指摘は、例えば第四期であれば、「強い主体」＝「加害者」としての外国人と「弱い客体」＝「被害者」としての日本人、といった図式で理解されそうだが、それとは逆に、実際の記事では「彼らが犯罪に手を染めるきっかけは、劣悪な労働条件など日本社会への反発からきている面もある」として、外国人がむしろ日本社会の被害者（客体）であるとの認識が示される。そして、それに対して、「日本がこれからも外国人たちと共生していかなければならない以上、しっかりした受け入れ制度の確立が望まれる」と、外国人との共生のために「受け入れ体制を確立」すべき政策主体として「日本」というナショナルな主体が措定されるのである。

同様の外国人側が被害者（客体）であるとの認識は、第五期後半の記事「現場 悪徳業者の

食い物にされた4万人の中国人研修生が犯罪予備軍と化している」（2004年11月24日号）や記事「歪み 時給800円の単純労働で3年後に強制帰国『外国人研修制度』の苛烈現場」（2008年7月9日号）にもみられる。

ところで既に我々は同型の記事を第一期後半の雑誌『S A P I O』のなかに見てきた。すなわち外国人犯罪の原因を外国人にみるのではなく、自分たち自身にみることによって、外国人との「混住」や「共生」社会の実現を目指す政策主体として、「われわれ＝日本人」というナショナルな主体が維持されるのである[倉, 2006:122]。ここでも第五期が第一期への回帰である点を確認することができる。

### <参考文献>

大澤真幸 2007 『ナショナリズムの由来』講談社。

倉 真一 2006 「保守系オピニオン誌における外国人言説（1）－1990年代前半までの雑誌『SAPIO』を中心に－」『宮崎公立大学人文学部紀要』14(1), 宮崎公立大学：113-128。

\_\_\_\_\_ 2007 「保守系オピニオン誌における外国人言説（2）－1990年代後半における雑誌『SAPIO』を中心に－」『宮崎公立大学人文学部紀要』15(1), 宮崎公立大学：103-113。

バリバル, エティエンヌ 2000 「国民的選好から政治の発明へ」『市民権の哲学：民主主義における文化と政治』青土社：第6章。

### <参考資料>

大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』（各年版）紀伊国屋書店。

小学館（編）『S A P I O』（1998年創刊～）小学館。

